

曲亭馬琴の善悪観

—『開卷驚奇俠客伝』に於ける「盗賊」のメタファーをめぐって—

任 姍

本発表では『開卷驚奇俠客伝』(1832 - 1835)に於ける曲亭馬琴の善悪観について論じる。馬琴が主に勧善懲悪に基づいて物語を構築することは周知のことであるが、馬琴の考える「善」「悪」がどのような概念で、どのような基準に沿って規定されているかについてはまだ十分に論じつくされておらず、研究の余地がある。

本発表では『開卷驚奇俠客伝』に登場する二人の大盗賊五十槌電次隆光と木綿張荷二郎に着目し、彼らが如何に善人のふりをして悪事を働くかについて分析、馬琴の善悪観を論じる。また、語り手や読者の視点から見る「善」「悪」と作中の人々が感じ取る「善」「悪」には齟齬があることにも注目した。例えば、五十槌電次隆光は裏の顔は盗賊だが、表の顔は地元の人に親切で、彼らをよその賊から守るような尊敬される郷土である。語り手は最初からこの登場人物が賊と言い切るため、読者も彼を悪人と認識しているが、一方で、作中の民衆にとって、彼は民を守る英雄である。『開卷驚奇俠客伝』第一巻の序文にあるように、仁義にも「有似而非者」（似て非なるものあり）。「善」「悪」という概念はイデオロギー上分別できるが、実際にその違いを見極めることは非常に困難である。

さらに、馬琴の「善」「悪」はしばしば仁義などの儒教的概念と結びつくが、本発表では馬琴があるいは儒教的道德観に対して実は疑義の念を持っていたと論じる。例えば、作中、木綿張荷二郎は仁義礼智の八徳を持っていると五十槌電次隆光が評価している。この描写が馬琴の『南総里見八犬伝』を連想させるのは勿論であるが、その外、道教の經典である『莊子』「雜編・盜跖」に登場する仁義八徳を備える大盗人盜跖をも思い出させる。馬琴は道教の大盗人のメタファーを用い、儒教観の仁義道德の偽善性を指摘しているのである。本発表ではこのように『開卷驚奇俠客伝』の大盗人の造型に注目し、馬琴の「善」「悪」の概念について再検討する。

曲亭馬琴の善悪観

—『開卷驚奇侠客伝』に於ける「盗賊」のメタファーをめぐって—

青山学院大学 任 姍

江戸時代後期の大文豪である曲亭馬琴（1767-1848）が主に勧善懲悪に基づいて物語を構築することは周知のことであるが、馬琴の考える「善」「悪」がどのような概念で、どのような基準に沿って規定されているかについてはまだ十分に論じつくされておらず、研究の余地がある。

馬琴の「善」「悪」の規定は一見、明確なものようであるが、馬琴の後期の長編読本作品『開卷驚奇侠客伝』（1832 - 1835）に於ける「盗賊」のメタファーを分析すると、「善」「悪」の境目が不明瞭になる。それと同時に、彼の勧善懲悪観を支える理論は儒教道徳に限定されないということも見えてくる。本研究では『開卷驚奇侠客伝』第一集の序文と、野上史著演という侠客、および二人の盗賊の人物像を分析し、馬琴が、儒学を含め、仏教や道教、法家思想を利用する目的と『開卷驚奇侠客伝』に於ける「善」「悪」の意味と判断基準を論じる。

『開卷驚奇侠客伝』は南北朝（1336-1392）が一統された直後の時代を背景とし、南朝遺臣である男女二人の主人公が君主と先祖に忠孝を尽くす為に足利將軍家に刃向かう物語である。彼らが後南朝の為に奮闘する姿は想像できるが、残念ながら本書未完の為、馬琴がどのような結末を用意したかはもう知ることはできない。しかし、未完作とはいえ、本作は広く読まれ、読者に長く愛されてきた。例えば、かの坪内逍遙や、幸田露伴、北村透谷も本書を愛読したらしい。『開卷驚奇侠客伝』の人気の理由は南北朝という皇統の正閏を争った動乱の時代において、「善」と「悪」ははっきり見分けられるか。そして、勧善懲悪は果たして有効であろうか、という問いを立てたことであろう。これらの問題については、馬琴は『開卷驚奇侠客伝』の中で彼なりの見解を示した。

儒学思想は江戸時代に入ってから段々影響力が強まって、江戸後期になると儒教道徳の教育は武士階層以外の一般人にまで広まり、儒教道徳観の代表的概念の仁義忠孝はよく文学作品の中で用いられた。例えば、馬琴の代表作である『南総里見八犬伝』（1814-1842）の主人公たちは一人ずつ仁義八行の徳の一字が刻まれる玉を持っている。本研究で取り上げる『開卷驚奇侠客伝』には、儒学の外、『莊子』『老子』『韓非子』なども含まれていることがその序からも明らかである。『開卷驚奇侠客伝』における馬琴の「善」と「悪」は、単純な儒教思想ではなく、彼は道教の道徳の相対性理論や人間本性への不信を抱く法家の理論などを援用し、儒教道徳理論の盲点への疑義を提示しているのではないか。

馬琴は『開卷驚奇侠客伝』第一集の序文の中で、様々な思想を用い、「侠客」という概念について論じている。序文の最初の部分を引く。

老氏の曰く。「大道廢れて仁義有り。」仁義は道の異称なり。而れども似て非なる者有り。故に韓非は儒俠を比べて之を擯斥す。曰く。「儒は文を以て法を乱る。俠は武を以て禁を犯す。」二つの者皆譏（ひ）なり。（『開卷驚奇俠客伝』第一集の序）

馬琴は冒頭から『老子』を引用した。但し、この部分は「仁義は道の異称なり」と続き、意味が取りにくい。ここで、『老子』の原文を引く。

大道廢れて仁義あり。知恵出でて大偽有り。六親和せずして孝慈有り。国家昆乱して忠臣有り。（『老子』）

則ち、大道が廢れた為に、仁義という次善のものが説かれるようになった。「知恵」や「孝慈」、「忠臣」などの概念も大道が失われてから生じたものである。言い換えれば、大道≠仁義。では、どうして馬琴はわざわざ『老子』を引用しながら、仁義は道であると主張したのだろうか。答えは続きの「似て非なる者」の存在にある。馬琴は儒教道德の代表的概念である「仁義」の本質と真偽について疑念を抱いている。続いて彼は『韓非子』を援引し、仁義の真偽について論じた。儒学者は学問の知識を用いて法律を乱し、俠客は武力を使って禁忌を犯す。「儒俠」はもともと仁義の品性を持つ人を指すが、「儒」と「俠」も偽物である可能性がある。『韓非子』の原文の続きも見てみよう。

儒は文を以て法を乱り、俠は武を以て禁を犯す、而るに人主兼ねて之を礼す。此れ乱るる所以なり。（『韓非子』）

韓非子は皮肉にも国家が乱れる根本原因が法を乱す儒者と禁を犯す俠客を礼遇する君主であると批判した。人間本性に不信感を抱く韓非子には「善」「悪」の判断基準の曖昧な道德よりも明確に規定された法律を以て国家を治めるべきと論じた。要約すると、馬琴は道教や法家の思想を通し、儒学の道德観の盲点を指摘した。視点を変えれば、「善」と「悪」の判断基準も変わる。儒教では善である仁義も道教の観点では次善なものになる。仁と義を持つ儒と俠も韓非子の観点からみると悪になる可能性がある。では、勧善懲悪を掲げた馬琴が描いた善人と悪人はどのような違いがあるか。また、我々は本当にその登場人物の善悪を正確に判断することができるだろうか。

『開卷驚奇俠客伝』の物語は母屋という後家が息子を連れて、野上史著演という俠客のもとを尋ね、一通の手紙を渡す話から始まる。母屋の亡夫である大六英直が生前自分には野上史著演という義兄弟がいると彼女に教え、手紙を渡して、著演に頼れと言いついて残して亡くなった。しかし、この話を聞いて、当の著演本人は見当もつかない。自称義兄弟の手紙を受け取って、中から何も書いてない一枚の白紙が出てくる。著演が思う。

英直俺と一面の。交りあるにあらねども。俺行状を傳へ聞て。妻子を託せんと欲するに。書記すべきよしのなければ。標書にのみ姓名を。写して白紙を封せしは。いはぬはいふ優るという。苦しき意中を示せしならん。（『開卷驚奇俠客伝』第一回）

英直は著演の風聞を聴いて善人だと確信し、著演も白紙の手紙を読んで

英直の意中を理解した。風の噂も白紙の手紙も信頼できる証拠とはいえない。さらに、英直は妻に義兄弟などのでたらめの話を読ませたのに、この嘘の裏に誠があると著演が判断した。このエピソードを一見すると、著演のような仁義者は自然に虚実を見抜き、善悪を見分けられると思うかもしれないが、彼の主張の根拠はどこにもないし、読者にあたえる現実的な教訓もあまりない。逆に、このエピソードは儒教道德の虚構性を曝し出す。

野上史著演という名前も非常に面白い。岩波の新大系注に指摘されるように、馬琴の友である殿村篠斎（1779-1847）は『侠客伝初集篠斎評』にこの人物の名前が「野史演義」を意味すると書いた。又、馬琴の別号の著作堂を指す説もある。「野史」も「演義」も当時の稗史小説（虚構の話）を指すもので、この意味では、著演という人物の名は小説・小説家の擬人名であり、彼は小説の虚構性を象徴する存在である。但し、小説の体現者である彼は白紙の手紙の価値を認め、それを真だと判断した。また、第三回に、彼が南朝遺臣の首級を奪還し、寺で埋葬した。真実を隠すために、埋めたのは自分が長年使ってきた禿筆だと偽って、その塚を「筆塚」と名付けた。ここでの筆は真実を記すものでなく、隠すものである。著演は本作一番の善人である。要するに、著演の名前も、白紙の手紙も、筆塚も彼のその虚構性を強調する工夫である。真の善は簡単に紙と筆では表せない。

善側の著演に対し、『開卷驚奇侠客伝』の悪人の代表者は二人の大盗賊五十槌電次隆光と木綿張荷二郎である。荷二郎は隆光を訪ねて、盗賊の一味に参加しようとするが、「投名状」を求められる。これは隠語で、金や美女を差し出すという意味である。荷二郎が美女一人を連れてくると、隆光は大喜びで、荷二郎をこう褒め称えた。

思ふに優たる人の才幹。その身獄舎に繋れしを。脱去たるは即智なり。その罪ならぬを憐みて。婦人を拯ひしは仁なり。その折に那恨ある。姦夫淫婦を殺せしは勇なり。又美しき婦人を獲ながら。そを遊女に售もせず。みずから犯さざりけるは。是則信なり義なり。況件の美婦人を。遥杳我に贈んとて。将て来けるは礼なり忠なり。是等の仁義八行を。一箇なりとも行ふもの。我党に誰かあらん。（『開卷驚奇侠客伝』第三十二回）

この二人の対話全体は儒者の会話を彷彿させるような書き方で、非常に皮肉なものである。特にこの隆光の発言は仁義八行を用いて荷二郎を評価した。これを読んだ読者は恐らくすぐに『八犬伝』を思い出すだろう。但し、善側の八犬士と違い、この仁義を持つものは大盗賊である。この部分の趣向や文体は『莊子』の一節に酷似する。原文を引く。

故、跖の徒、跖に問ひて曰く、盗にも亦道有るか、と。跖曰く、何くに適くとして道有ること無からん。夫れ妄りに室中の蔵を思ふは、聖なり。入るときに先んずるは、勇なり。出づるとき後るは、義なり。可否を知るは、知なり。分つこと均しきは、仁なり。五者備はらずして能く大盗を成す者は、天下に未だ之有らざるなり、と。（『莊子』）

『開卷驚奇俠客伝』も『莊子』も大盜賊になるには儒教的道德品性が必要だと論じる。『莊子』のこの節の続きは大盜賊と聖人の一体両面性に関するもの。

善人も聖人の道を得ずんば立たず、跖も聖人の道を得ずんば行かず。天下の善人少なく、不善の人多ければ、則ち聖人の天下を利するや少なく、天下を害するや多からん。故に曰く、唇竭くれば則ち齒寒く、魯酒薄ければ而ち邯鄲困まる。聖人生まれて大盜起る、と。聖人を掎撃し、盜賊を縦舍して、天下始めて治まる。夫れ川竭きて谷虚しく、丘夷かにして淵実つ。聖人已に死すれば、則ち大盜起らず、天下平かなれば而ち故無し。(『莊子』)

「聖人の道」とは儒教道德の規則で、善人も悪人も自分の道を究めたければ儒教道德を身につけなければならない。逆に言うと、儒教道德は「善」「悪」を判断する基準にはならない。むしろ、仁義という概念が聖人に依って作り出されたから大盜賊が現れたので、大悪人を生み出したのが大善人であるということになる。莊子は更に大盜賊と国賊の関係について論じる。

彼の鉤を窃む者は誅せられ、国を窃む者は諸侯と為る。諸侯の門にして、仁義存す。則ち是仁義・聖知を窃むに非ずや。…此盜跖を重利して禁ず可からざらしむる者なり。是乃ち聖人の過なり。(『莊子』)

国賊は聖王から国土を盗むだけではなく、仁義も聖知も一緒に盗む。仁義と聖知を持つ賊は果たして悪人か、それとも善人か、判断するのが非常に難しい。『開卷驚奇俠客伝』の舞台は南北朝一統の直後に設定し、南朝の遺臣と足利將軍の衝突を描く。面白いことに、作中では足利將軍側と後南朝側はお互いを指して国賊と呼ぶ。例えば、第二十四回には、南朝の遺臣である姑摩姫が四代室町將軍である足利義持と対峙する。將軍側の畠山満家が姑摩姫のことを「国賊」と呼ぶのに対し、姑摩姫は義持とその父足利義満を「大逆賊」と批判する。馬琴は最初から後南朝を善側とし、足利將軍を悪側と決めたので、一見「善」「悪」ははっきりしている。但し、それぞれの立場にある登場人物の発言からは、「善」と「悪」の境界線が絶対的なものではなく、相対的なものであることがわかる。

馬琴は一見勸善懲惡を掲げ、読者を正しく教育するような態度をとるが、実際はそうではないかもしれない。『開卷驚奇俠客伝』第一集の序文に彼が本作を書いた目的を記した。彼は「激せず、憤らず」、只「人の心を快くせんと思欲す」。儒学も道教もほかの説もそれぞれ「善」「悪」について異なる角度からの解釈を提供した。馬琴は本作でただそれらの可能性を読者に提供し、「善」「悪」の判断は読者が自分で弁証的に考えて下すべきと示しているのである。